カフカとブロート（Ⅰ）

河中　正彦

感性デザイン工学科

マックス・ブロートは、現在では単にフランツ・カフカの親友、遺稿の管理・出版者、伝記作家としてしか知られていないが、カフカの生前には、彼よりはるかに有名な作家・思想家・音楽家であった。二人の知名度が逆転するのは、カフカの死後３０年以上も経ってからのことである。この論文は、自明すぎて、かえってまとまった考察の対象となりにくいカフカとブロートの友情の成立を、四つの段階に分けて考察していく。　１）ブロートのショーペンハウアー講演の際のカフカとの出会い（１９０２年）
２）カフカの親友ポラークとの別れ（１９０４年）　３）カフェー・ルーブル事件（１９０５年）
４）ブロートの親友ボイムルの死　（１９０８年）

Key Words : Rettung der Manuskripte, Brentano-Schule in Prag, A. Marty und Chr. Ehrenfels, Louvrezirkel, Entstehung der intimsten Freundschaft

第１章　原稿の救出

マックス・ブロートは多才な人であった。彼は文学の領域でも、詩・戯曲・小説・エッセイ・伝記・自伝と、ありとあらゆる分野にわたって足跡をとどめ、生涯の出版件数は約８５０、翻訳を除いた自著で書物になったものだけでも８３冊にのぼる。その他に音楽家としての、また思想家としての活躍がある。彼は隠れた才能の発見者として知られていて、文学ではフランツ・カフカ、フランツ・ヴェルフェル、ヤロスラフ・ハシェク、音楽ではレオス・ヤナーチェック、カール・ニールセンは、ブロートの紹介に依らなければ世界的に名が知られることはなかっただろうといわれている。だがいまでは彼自身の文学的な業績はすべて忘れ去られ、もっぱらカフカの親友、カフカの伝記作家、カフカの遺稿の管理者としてしか知られていない。

ドラマに脇役が不可欠であるように、時代という壮大なドラマにも脇役が必要であるならば、ブロートこそは脇役、名脇役であった。彼はカフカをいろんな意味でカフカたらしめた張本人である。だが脇役の脇役たるゆえんは、「割に合わない」役回りを強いられることにある。彼が編集した『カフカ全集』の編集は、文献学者の袋叩きに会い、ブロートの『カフカ伝』は、その神学的解釈が災いしてこれまた不評を買った。だがひとはカフカの何をブロートに負うているかを自問してみるべきである。まず第一にブロートは、三度カフカの手稿を救っている。

最初は、ブロートがカフカの遺言に従わずに、彼の原稿を焼却から救ったことである。カフカの死後ブロートは、彼の机の引き出しのなかからブロート宛のメモを発見した。そのメモはブロートに原稿の焼却を依頼していた。

「親愛なるマックス、ぼくの最後の頼みだ。ぼくの遺稿……は日記であれ、手稿であれ、他人や、自分の手紙であれ、スケッチであれ、すべて残らず読まずに焼却してほしい。[1)]」

その委託がどの程度の真剣さで述べられたものかを、ブロートは多分誰より正確に計ることができた。なぜなら彼らの間ですでに生前から「遺書」のことは話題に上っていたからだ。ブロートが、『審判』の「後書き」に詳しく述べているとおり、１９２１年彼の転職の際、彼の作品のうち破棄すべきものと見直すべきものを指示した自分の遺言を伝えると、それにつられてカフカは、自分の意志を述べた。それは簡潔な「全部焼いてくれ」というものであった。ブロートは当然ながら「そんな頼みには応じられない」と答えると、カフカはそれ以上つっこまなかったようである[2)]。

ブロートは、１９２１年以降カフカが自分のこの遺言をみずから守っていないことをもって、カフカの遺稿を出版したことを正当化している。確かにブロートとのこのやりとりの後もカフカは、『観察』の部分的転載に同意したり、『断食芸人』の出版に積極的に取り組んでいるのだから、ブロートの主張もあながち牽強付会とは言えまい。遺言からの救出が、ブロートの最初のそれであったとすれば、第二の救出はナチからの救出であった。

©1997 The Faculty of Engineering, Yamaguchi University

ブロートは１９３９年3月１４日の夜9時、ヒットラー軍のプラハ侵入のまさに前夜、プラハ脱出に成功した。ブロートは翌朝にはもうゲシュタポの捜索を受けたたから、ぎりぎりの脱出であった[3]。だがその際ブロートはカフカの原稿をしっかりと旅行鞄に詰めていて、片時も離さなかった。カフカの原稿はこうしてブロートとともに、黒海沿岸のコンスタンザまでは汽車で、そこからはルーマニアの汽船でテル・アヴィヴへ旅したのである。だが原稿はそれほど安全な旅をしたわけではない。途中コンスタンチノープルで、ナチの船が横付けされ、ブロートひとりがトルコの官憲の尋問をうける一幕もあった。原稿は、いつなんどき没収されてもおかしくない状況下にあったのである。ブロートはだが脱出の際、じぶんの日記のほうはプラハに置き去りにせざるをえなかった。ブロートの手元には、彼が『カフカ伝』に用いるために抜粋したものしか残らなかった。このような犠牲のうえに、カフカの原稿は救い出された。[4]

ブロートが三度目にカフカの原稿を救ったのは、原稿をオックスフォード大学のボドレアン図書館に委託した措置であった。カフカの「批判版全集」の編者は、１９５６年イスラエルが近東の戦争に巻き込まれそうになったとき、ブロートによって原稿は一度はスイスに送られ、１９６１年にカフカの遺産相続者の望みでイギリスに運ばれた、と述べている[5]。（「カフカ・ハンドブック」は、それを１９６２年のこととしている[6]。）

このようにカフカの原稿はあやうく灰燼に帰する危機を何度となくくぐってきたのであるが、そのつどブロートの無私な判断と決断によって救われたのである。ブロートがいなかったら、作家カフカはおよそ我々の目に触れることはなっかたと、断言できよう。

第２章　仕掛人ブロート

ブロートは単にカフカの原稿を救っただけでなく、カフカを文字通り作家に育て上げたといってもいい。ブロートが自ら述べているように、カフカの文学への意欲が衰えかけると、彼を書くことにに向かわせるようにしかけたのもブロートであった。例えば１９０９年カフカが数カ月間なにも書けなくて、自分の才能はたぶん枯渇してしまった、自分はもう終わりだ、と嘆いていたとき、ブロートはカフカにひとつの提案をした。

「私はカフカに、彼が観察したものはすべてただちに書き留めて、論説に纏めるように要求した。彼と私の間のスポーツめいた決闘のアイデアによってこの考えに味付けをした。私も論説をかくから、どっちのほうがうまい表現ができるかやってみようじゃないかと。そんな遊びめいた、子供じみた目標設定が、カフカに効果的でないことはめったになかった。」[7]

見事にそれにはまったカフカは、ドキュメント「ブレッシャの飛行機」を書き、プラハの新聞「ボヘミヤ」に掲載されたが、それはたぶん飛行機に関するドイツ文学で最初の記述であるという。[8]

ブロートはまたカフカを出版社に売り込むことにも熱心であった。当時新傾向の文学に理解のあった出版社といえば、クルト・ヴォルフ社であった。ヴォルフの回想によれば、それは１９１２年7月２９日のことであった。やがて袂を分かつことになる彼とエルンスト・ローヴォルトは、カフカとブロートの二人と、まだみすぼらしかった事務所で面会した。ヴォルフは、「興行師が自分の発見したスターを紹介している」という印象を抱いてしまったと、失礼さを詫びながらも、正直な第一印象を述べている。

「もしこの印象が心苦しいものだったとしても、カフカの人となりには、この感情移入を軽いジェスチャーや冗談でかわすことのできないところがあったのである。黙りがちで、ぶきっちょで、繊細で、傷つきやすく、試験官を前にした高校生のようにおずおずとしていて、興行師の謳い文句によって呼び覚まされた期待をけっして叶えられないことを確信しきっていた。自分を商品として紹介してもらうことなど、どうして彼に了承できようか。」[9]

別れ際にカフカは、「原稿を送り返していただけるなら、それを出版していただける場合より、もっとあなたに感謝するでしょう。」と言ったそうである。[10] カフカのこの受動的・消極的な姿勢は彼を作家として世間的に認められることの大きな障害となった。ブロートをもってしても、カフカを生前に世界的な作家として認めさせることはついにできなかったのである。

現在のカフカの名声からはおよそ考えられないことかもしれないが、当時カフカは作家として全く知られていない存在であったのに対して、ブロートはすでに花形作家として認められていた。ブロートは

すでに長編小説「ノルネピッゲ城」（１９０８）、「チェコ人の女中」（１９０９）、「ユダヤ女たち」（１９１１）の三冊、短編集「死者に死を」（１９０６）、「実験」（１９０７）、「高級遊女への教育・深紅へのハイキング」（１９０９）の三冊、詩集「恋人の道」（１９０７）、「詩で書いた日記」（１９１０）の二冊、さらに喜劇「青春への訣別」（１９１１）[11]を加えて、文学のあらゆるジャンルに手を染め、まさに飛ぶ鳥も落とさんばかりの多産な作家だった。

なかでも長編小説「ノルネピッゲ城」は、ベルリンの批評家クルト・ヒラーに「ノルネピッゲは長編小説ではなく、ニーチェがダイナマイトと呼んだものである。」[12]とまで言わしめた。この小説は、ヒラーや彼の友人たちにとって「聖書」[13]であった。「ノルネピッゲは私の体の分子を革命してしまった（掻き立て、結合を変えてしまった）」[14]のである。だがヒラーの高い評価は、ブロートがユダヤ民族主義（シオニズム）と美意識上の古典主義への回帰をとるにつれ、変化していった。

片やカフカには当時雑誌に寄稿した作品はあっても、まだ本として出版したものはなかった。そして雑誌に掲載されたものでさえ、ブロートが「大変なエネルギーを使って」出版にこぎつけたものだったが、幾つかの書評を除いては、文学者たちの注目するところにはならなかった[15]。

およそカフカ作品の出版でブロートの尽力に依らないものはない。それどころかブロートは、まだ一行も活字になったことのないカフカの名を、「現代」誌（１９０７年２月９日）にトーマス・マンやヴェーデキントなどの錚々たる作家と並べて挙げるということまでしている[16]。しかしカフカは、ブロートが売り込みの努力をすればするほど、ブロートの風下に、その陰に立たざるをえなかった。二人の作家の世間的な評価の違いをまざまざと見せつける事例として、カフカのミュンヘンでの朗読会を挙げることができよう。

ミュンヘンの画廊ゴルツから「新しい文学の夕べ」の参加への招待を受けたのはブロートであった。しかしブロートはカフカと一緒ならという条件の下にこの招待を受けたのである[17]。外国ドイツからの招待に喜んだボヘミア人カフカは、やがて苦い幻滅を味わわなければならなかった。

「私は今日、マックスが招待を斡旋したことを知ったので、私の行く気はそれに応じて殺がれました。」[18]結局自分は添え物にすぎないのか、という自覚は辛いものだったにちがいない。ブロートが差し障りで行けなくなり、カフカはひとりでミュンヘンに行き、自作「流刑地にて」を朗読する。外国での朗読会はカフカの生涯で、ただこれ一度だけであった。

このような事情を見るにつけ、浮かび上がってくるのは、いったい同時代の評価とは何なのか、歴史的評価とは何なのかという疑問でであろう。カフカとブロートの関係ほど、この両者の激しい逆転を蒙ったものは、希ではなかろうか。生前はカフカはブロートの付録であったが、いまではブロートはカフカとの関連でのみ思い起こされる存在にすぎない。

第３章　友情の根拠

だがブロートはなぜあれほどまでカフカを敬愛したのだろうか。ブロートはカフカの魅力を次のように語っている。

「私が、カフカの何に魅了されたかを素描すれば、こういうことになろうか。私が他の誰にも、たいへん重要で有名な人たちにも感じたことのない何か尋常ならぬ強力なものが彼から発散していた。この特別なものを、とりわけカフカの死後に、しばしば私は分析してみようとした。というのも彼が生きている間は、それはとても当たり前で、まさに自明なもののようにおもわれたので、それがじっくりと考えてみるに価するものだなどと思いつかなかったからである。てっとりばやく言うなら、この独特で極めて個人的なものは、こう表現されよう。決して途切れることのない彼の着想はぎっちりと隙間なく溢れてきて、どんな空白も許さなかった。彼は重要でないことは一言も言わなかった。彼の口から出てくる彼独特な考察法の貴重な表現は年を経るごとにますます巧まざるものとなった。その観察法は、寛容で、活力に充ち、世間の愚かしさにはアイロニカルな思いやりを示し、だからまた苦いユーモアをたたえたものであっが、しかし真の核心である「破壊できないもの」を決してなおざりにしない、だから思い上がったものやシニックなものに最も背を向けたものであった。[19]」

カフカは「クリダス（黙りん坊）」[20]と呼ばれるほど、寡黙な人であったが、ひとたび口を開くとその表現は極めて洗練された箴言風の定式化となって現れたので、肯綮に当たる彼の発言は、友人や知人の心に拭いがたい印象を刻印した。カフカにとって「単なる日常的なもの」は存在しなかった。カフカにとっては、「ありきたりなもの」が、そのまま「奇跡」であった。

「彼の身近にいると、日常は変貌し、すべてが初

めて見られたかのように作用し、まっさらになった。しばしばそれは、極めて悲しい、打ちひしぐような仕方で、まっさらなのだが、かといって慰めの可能性を究極的に排除するというのでは決してなかった。というのもそれは、決して白けた、平板なものにはならなかったからである。[21]」

カフカの日常と奇跡の逆転した関係をよく物語るエピソードが残っている。ヴィリー・ハースやフランツ・ヴェルフェルが心霊術やテーブル・ターニングに凝っていたとき、カフカとブロートがそこを訪れたことがあった。カフカは全然感心しなかった。その際カフカが残した言葉は、極めてカフカ的である。「明日朝早く太陽が昇るというのは、奇跡です。しかしあなたたちがそんなに時間をかけて机をいたぶったら、机が動くというのは、奇跡じゃありませんよ。[22]」カフカはフェリス・バウアー（フェリーチェという読みは間違い）にこう警告している。「フェリス、生を陳腐だと思わないように、もしこの『陳腐』というのが『単調・単純・つまらなさ』を意味するのなら。生は単に恐ろしいだけです。このことを私は他の誰よりも強く感じています。[23]」カフカの文学はだから、一見陳腐な日常の事柄しか描かれていないようにも読めるだろう。事実そのようにカフカの文学を読む人だっているのである。例えば、フリードリッヒ・ジーブルクは、カフカをアイヒンガーと比較してこうのべている。

「カフカの描写法はまったくリアルで、ほとんど自然主義的であり、最高度の単純性をそなえている。……彼の物語を幻想的と呼ぶことほど誤ったことはなかろう。その深さは日常性を頑固なまでに掴んで離さないことから生じている。[24]」

このような読みが正しいとして引用するのではないが、カフカの一面を穿っていることは確かなのだ。

第4章　友情の発端

ブロートがいつカフカと出会ったかは、すでに確定されている。１９０２年１０月２３日プラハのドイツ学生会館(Lese- und Redehalle deutscher Studenten)で「ショーペンハウアー」という講演をブロートは行った[25]。熱烈なショーペンハウアー崇拝者だったブロートはその際、ニーチェを「いかさま師」とあっさり切って捨てた。講演のあとで、いつもは無口なカフカが珍しく彼の方からブロートに話しかけたのである。カフカはニーチェを深く畏敬していたので、帰り道でブロートの余りにも粗雑な定式に強い反対意見を表明したという。

彼らはブロートが住んでいたシャーレン街から、カフカの家があったツェルトナー街の間を行ったり来たりしながら、徹夜で議論を交わした。話は哲学から文学論に移っていった。というのもカフカは、ブロートの持ち出す大思想家の引用に詳しい質問で突っ込みを入れるので、哲学の話では持たなくなったのである[26]。この時ブロートは、マイリンクの『すみれ色の死』を話題にした。ブロートは、それに対してカフカがホーフマンスタールの「玄関の湿った石の臭い」で対抗したと『カフカ伝』[27]では述べているが、この詩句が１９０４年の「詩についての対話」に基づくものだとヴァーゲンバッハに指摘されると[28]『論争の生涯』[29]では、引用は１９０２年の「チャンドス卿の手紙」からだったかもしれないと、はなはだ心許ない。

単に心許ないばかりではない。ブロートには無意識の作意が、彼がカフカと出会った直後から直ちに肝胆相照らす親友の間柄になった、というふうに見せかけたいという作意がみられるように思われる。ブロートは『カフカ伝』では、「私たちの関係が、最初はとてもゆっくりと進展していって、まったく打ち解けるまでに数年を要した。」[30]と率直に述べている。だが『論争の生涯』では「対立は強烈だった。それに応じて二人の心のぶつかりあいもまた激しかった。友情の炎は最初から高く燃え上がった。」[31]ことになっている。しかし二人の関係が「ニーチェ対ショーペンハウアー」の関係になってしまうなら、はじめからそうしっくりいくはずがない。パウウェルにいたっては、ブロートに対するカフカの反論自体が「友情の礎石となった[32]」と述べているが、事実はそんなに簡単に交友関係が芽生えたのではない。

ブロートは１９５４年の『カフカ伝』でもなお「ニーチェに対する私の嫌悪は今日にいたるまで変わらない[33]」と述べている。ブロートのニーチェ嫌悪は終生かわることはなかったのであり、カフカは多分ブロートの前でニーチェを話題にすることを意識的に避けただろう。文学上の趣味でもブロートはマイリンクのけばけばしい表現主義に惹かれており、カフカのゲーテやホーフマンスタールの自然親和と正反対である。

ブロートは一九五四年の『カフカ伝』では、二人の出会いを「一九〇二年の秋か冬、多分すでに１９０２年年の冬学期に」[34]と正しく推定しながら、１９５８年のヴァーゲンバッハの『カフカ伝』が、正確に１９０２年１０月２３日とその日時を確定しえているのに、１９６０年初版の『論争の生涯』ではそれを見逃して、「多分１９０３年の春」[35]と不正確な方へずらしている。このような「操作」

が意識的なものか無意識的なものかは、にわかには断じがたいが、二人の関係が「比較的親密になるのは、１９０８年以降」[36]（これはこれであまりにも遅すぎる）というヴァーゲンバッハの記述に対して『論争の生涯』で激しい怒りを示した[37] ブロートの心の揺れを示していることだけは、確かである。

ブロートはカフカからもらった最初の手紙を「１９０３年か１９０４年」[38]と推定している。こうすれば彼らが出会った直後にもう手紙をもらったことになる。ブロートはカフカとの出会いと最初の手紙の間に、できるだけ時間の経過を置きたくない。それが彼に出会いの時期を遅く、手紙の日付を早く見せかけたい心理的な背景をなしている。しかし新しく編集された『カフカ・ブロート往復書簡集』でこの手紙は、編者ペイズリーによって１９０４年のものと推定されている[39]。「数年のあいだ私は、カフカがものを書くということを知らずに交際していた。[40]」とブロートは述べている。カフカが書くことを知らずして、親交とは言えないだろう。

ブロートの「１９０３年から毎日会っていた。[41]」という証言はとてものことに信用できない。なぜなら１９０２～4年にカフカはオスカー・ポラックと、ブロートはマックス・ボイムルと最も親しい間柄であったからだ。彼らの関係は初めから一挙に燃え上がったというよりは、いくつかの節目をへて、深化していったものと考えた方がよい。第一の節目が１９０２年１０月２３日のブロートのショウペンハウアー講演だったとすれば、第二の節目は１９０４年1月２７日以降のカフカとオスカー・ポラックとの友情の破綻、第三の節目は１９０５年１０月７日直後のカフェー・ルーブル事件、第四の節目は１９０８年１１月4日のブロートの親友マックス・ボイムルの死ということになろう。それらを丁寧に追跡しないと、実像に迫れないだろう。

オスカー・ポラックとカフカの関係は、カフカの手紙の次の一節に集約されよう。

「若い人々のなかでぼくは本来君とだけ話をした。他の人たちと話したとしてもそれは、ほんのついでにすぎないか、君に関してか、君のせいでか、あるいは、君に関連してかにすぎなかった。君は、ほかの多くのものでもあったのだが、まずぼくにとって窓、それを通してぼくが通りを覗くことのできる窓だったのだ。[42]

彼との３年間の交際ではカフカの方が積極的だったが、ポラックの方はカフカの暗さを充分には受けとめきれなかったようだ。二つの要因がカフカとポラックを引き離した。一つは、１９０３年秋にポラックがピルゼンの南ジュディレツ近郊のオーバー・ストゥディネツ城に家庭教師の職をえてプラハを離れたこと[43]が挙げられよう。いま一つはポラックがいわば形而上学的な不幸を喪失して、あまりにも「明るく」なり、カフカの「不幸」に感応しなくなったことである。

「しかし君はほんとに幸福だ、君の手紙は輝くばかりだ。思うに君は以前ひどい交際のせいで　不幸であったにすぎない、当然のことながら、日陰で日向ぼっこはできないからね。[44]」

かくて彼らの関係は、終わるべくして終わったようである。だがポラックへの愛情はカフカのなかに根強く残っていたのか、１９０７年５月のブロート宛の手紙にヴラディスラウス街のポラックの住所を誤って書いてしまっているくらいなのだ。だからブロートへの友情がカフカのなかに深く根付くのには、ポラックからブロートへとカフカの視線が決定的に移るのには、別の事件が、１９０５年１０月の事件が是非とも必要であった。この事件はブロートにとって余りにも辛い事件であったので、彼は記憶の奥にそれを押し込んでしまっていた。『カフカ伝』ではブロートはそれについてなにも語っていない。この事件でブロートはブレンターノ学派のサークルからいわば「貝殻追放」の憂き目に合った。したがってこの事件について語る前にプラハのブレンターノ学派についてあらかじめ知っておく必要がある。

（続く。Ⅱは「山口大学・独仏文学」19号に掲載予定）

参考文献　註と略号

1) Franz Kafka : Der Prozeß. Gesammelte Werke. hsg. von Max Brod. Fischer.1965. S.316-317
（以下、**P.**と略記する。）

2) Kafka : P. 318-319

3) Max Brod: Franz Kafka als wegweisende Gestalt. Tschudy-Verlag. 1951 .S.47 (=**Brod: KWG.**)
Max Brod: Streibares Leben.- Autobiographie 1884-1968. Insel.1979 p.28 7 (=**Brod:StL**)

4) Max Brod: StL 189

5) Franz Kafka : Das Schloß. Kritische Ausgabe. . Hg. von M. Pasely. Apparatband, S.15 (=**KKAS II**)

6) Hartmut Binder(Hg.): Kafka-Handbuch. .Band 2. Kröner. 1979. S.6 (=**KH－II**)

7) Max Brod: Über Franz Kafka. Fischer. 1974. (Fischer Bücherei 1496) S.93 (=**Brod:ÜFK.**)

8) Ludwig Dietz: Franz Kafka-Veröffentlichungen zu seinen Lebzeiten. Lothar Stiem. 1982. S.30

9) Hans-Gerd Koch:Als Kafka mir entgegen kam.

Erinnerungen an Franz Kafka. Wagenbach Verlag. 1995.S. 95
10) Hans-Gerd Koch: S.98
11) Berndt W. Wessling: Max Brod. Bleicher. 1984. S.125 W. Kaiser/H. Gronemeyer: Max Brod (Bibliographie) S.37, 53, 62-5,
12) Donald G. Daviau: Max Brod und Berlin. S.145-158. in 》Berlin und der Prager Kreis《 (Hg. Margarita Pazi und H.D. Zimmerman. Könighausen und Neumann. 1991) S. 155.
13) Margarita Pazi(Hg.): Max Brods Roman "Schloß Nornepigge",1908. in 》Max Brod, 1884-1984. Untersuchungen zu Max Brods literarischen und philosophischen Schriften.《 Peter Lang. 1987. S.125
14) Donald G. Daviau: Max Brod und Berlin. S.155.
15) Max Brod: ÜFK S.61
16) Max Brod: ÜFK S.60
17) Joachim Unseld: Franz Kafka -Ein Schriftstellerleben. Hanser. 1982. S.141
18) Franz Kafka: Briefe an Felice. Fischer 1967. S.703 (=F.)
19) Brod: ÜFK. S.64
20) Brod: ÜFK. S.79
21) Brod: ÜFK. S.64
22) Willy Haas : Die literarische Welt. List. 1960. S.35-36
23) Kafka: F. S. 424
24) Sieburg, Friedrich : Nur für Leser. Jahre und Bücher. Stuttgart 1955. S.151. (Hier zitiert nach <Reinhard Urbach: Aspekte literarischr Kafka-Rezeption in Österreich. in > Was bleibt von Franz Kafka < Schriftenreihe der Franz-Kafka-Gesellschaft 1. Braumüller. 1985) S.200
25) Wagenbach, Klaus : Franz Kafka - Eine Biographie seiner Jugend. Francke.1958. S.102 und Chris Bezzel: Kafka-Chronik. dtv. 1983. S.22 この時の講演は『カフカ伝』では「ニーチェとショーペンハウアー」(MaxBrod:ÜFK.S.45-6.)となっているが、『指針の人カフカ』では「ニーチェ」(S.15)についての講演となっている。しかしヴァーゲンバッハの指摘によって、『論争の生涯』では「ショーペンハウアー」(Max Brod: StL. S.159)と訂正されている。
26) Brod: ÜFK S.46, StL. S.160-162
27) Brod: ÜFK. S.45
28) Wagenbach, Klaus.: Franz Kafka. Eine Biographie seiner Jugend 1883-1912. Francke, 1958. S.102
29) Brod: StL. S.161
30) Brod: ÜFK. S.53
31) Brod: StL. S.162
32) Pawel, ernst: Das Leben Franz Kafkas. Hanser. 1986. S.130
33) Brod: ÜFK. S45
34) Brod: ÜFK. S.43
35) Brod: StL. S.159
36) Wagenbach: FK.: S.7,63
37) Brod: StL. S.162
38) Kafka: Br. S. 24-25
39) Brod / Kafka : *Eine Freundschaft. Briefwechsel* S.Fischer 1989. S. 9
40) Brod,: ÜFK. S.59
41) Brod: StL. S.163
42) Kafka: Briefe. Gesammelte Werke. hsg. von M. Brod. Fischer.1958. S.20. (9.11.1903) (=Br.)
43) Kafka: Br.S.19, S.497. und Binder: KH-I S.251
44) Kafka: Br. S. 28. (27.1.1904)

(1997.4.15.受理)

FRANZ KAFKA UND MAX BROD

Masahiko KAWANAKA

Der Dichter Max Brod, der zu Lebzeiten Kafkas wesentlich berühmter war als Kafka, ist gegenwärtig allgemein nur als Kafkas treuer Freund, Biograph und Nachlaßverwalter bekannt. Die Beziehung wird überall in der Kafka-Literatur erwähnt, aber kaum zusammenhängend betrachtet. Im folgenden wird die Entstehung der Freundschaft zwischen ihnen in vier Etappen erörtert:
1) die Bekanntschaft Brods mit Kafka beim Vortrag über Schopenhauer (23.10.1902)
2) die Trennung Kafkas von Oskar Pollak (27.1.1904) 3) der Fall Café Louvre (kurz nach 7.10.1905)
4) der Tod von Max Bäuml, dem besten Freund von Max Brod (4.11.1908)